

わたしたちのふるさと
おもかげ
面影

37の歌碑と歴史

我せこが面影山のさかるまに
われのみこひてみぬはねたしも

面影山遊歩道の歌碑めぐり

私たちが朝夕眺める歴史に彩られた面影山。

面影山には万葉歌人や俳人の詠んだ37の歌碑が点在しています。経年劣化で所在すら危ういものもありましたが、この度すべての歌碑の取り替えを行いました。完成を記念し歌碑の解説や作者のプロフィールそして面影地区にある史跡を地図とともにご紹介します。

奈良時代、「今木山」「甑山」「面影山」を「因幡三山」と呼びました。都からやってくる位の高い役人は役所であつた国庁(現国府町)にて、「面影山」をながめては、奈良の都の「大和三山」を思い出し、都に残してきた妻や子の「おもかげ」を偲んだといわれます。

万葉歌人や、俳人の歌は人に命の温もりをあたえてくれます。

この冊子を手にも、晴れた一日、面影山の散策をお楽しみください。



1
我せこが面影山のさかゝるまに
われのみこひてみぬはねたしも

いとしい人が面影山の(そばに)いて
私だけが恋しく思ってしまうのは
何とも腹立たしいことです

オオトモノサカノウエノイラフメ
大伴坂上郎女 六八九七七〇

大伴安麻呂の子。石川内命婦を母とし、旅人は異母兄で、家持は甥に当たる。「万葉集」の代表的歌人で、長・短歌あわせて81首が収録されており、女性歌人では最多である。名前は「大伴家の坂の上に住んでいるお嬢さん」という一種のあだ名といわれている。この歌は、因幡に赴任した家持を偲んで詠んだ歌で、「古今和歌集」に収められている。





2

はらの上に置く菅笠や天の川

菅笠を腹の上に置いて
仰ぎ見る天の川

タナカ カンロウ
田中寒楼 一八七七―一九七〇
鳥取市河原町小畑出身

西郷小学校の代用教員より、用瀬、国英、八上、智頭校を
歴任し、退職後は俳人、歌人として「酒仙の人、奇行の人」
と言われ、一生を奔放に生き抜いた。



3

ありし世の面影山の御所さくら
見るこちする春のあけぼの
かつてあったという面影山の御所桜を
まるで見ていたかのような心地がする

シユウケン オシヨウ
秀元和尚 生年不詳
長慶庵住持

1812年に、長慶天皇の大杣御菩提所「長慶院」の由
來記を書き残しており、その写しが継承されている。



4

大空のました帽子かぶらず

どこまでも広がる大空の下
帽子もかぶらずに自由でいる

オザキ ホウサイ
尾崎放哉 一八八五―一九二六
鳥取市立川町出身

東大卒のエリートでありながら、一切を捨て、各地を流転
遍歴、自由律俳壇に不滅の功績を残す。



5

ちとせともかきらぬ田鶴のこゑすなり
わが新むろの春のしるしに

千年生きるともいわれる鶴の鳴き声がしている
な、私の新居におとずれた春（を言祝ぐかのよ
うな）しるしに

ナガエコウチノカミノリマサ
永江河内守則政 一八〇〇―一八七〇

倉田八幡宮宮司、藩主慶徳公の寵遇を受ける。故あって、雲山
八幡宮山麓に新居を構え、夫人とともに隠居した。

6 千代しむる君がかきつゝの松が枝に
おり居る鶴のこゑゆたかなり

【⑤の歌をうけて】千年の世の長きにわたっ
て栄えさせるあなたが困った松の枝に降り
てくる鶴の鳴き声の、なんと豊かなこと
でしょう

ナガエ オミヨ
永江於美世 一八〇二―一八七二

永江河内守則政の夫人で、貞淑賢母の誉れ高く、歌道に
優れ、達筆家としても知られている。

7 揚雲雀いくつも聞こえ一つみゆ

ひばりの群れの鳴き声が響き、
一羽姿がみえる

カワカミ ケンジ
川上蜷児 一九〇〇―一九七一
鳥取市国府町高岡出身

俳人、大正15年「鳥取ホトトギス会」結成の中心人物と
なる。俳誌「野火」を発行

8 淡柿のいたづらに赤きがかなし

淡柿がいたづらに赤いのが、何とも言えな
い（気持ちがある）

サワ ゼツチヨウ
沢 舌長 一八七七―一九四三
鳥取市外行徳出身

川柳家、明治37年、川端川柳社創立。44年東町に蓬萊館
経営、詩友に、白井喬二、岸本水府ら



9

雲の中ふかく籠れるもみじ葉の
おのづからなる明かりはにじむ

雲の中にいるようなふかい霧にこもって、
さえぎられてしまった中で、もみじの葉の
（鮮やかな）明るさがにじみ出ている

トクダ フミサト
徳田文郷 一八九六―一九七〇
鳥取市宮谷出身

歌人、少年の時、白茅と号す。昭和13年「大藪」を発行、
その編輯人となる。歌集「多羅葉」あり

10 菊うらら即ち命うららなり

一面に咲き乱れる菊、
すなわち輝く命である

クニタ タカシ
国田たかし 一九一五―一九八四
鳥取市河原町出身

俳人、昭和47年八頭高等学校長、52年、毎日俳壇賞受賞、
59年、句集「天の川」「菊うらら」発行

11 雨垂れに
ひとは上手な詩をつくり

雨垂れひとつとつてみても、
（その情景から）人は上手な詩を読む

カワムラ ニチマン
河村日満 一九一四―一九八三
鳥取市叶出身

川柳家、元鳥取市議会議員、鳥取県川柳作家協会会長

12

どこにいても
ふるさとがあるかぜかおり

どこにいても、ふるさと（の風）をかんじることができる

森田 茗人

倉吉市新町出身

川柳家、昭和29年鳥取川柳会結成、「川柳鳥取」発刊、50年鳥取川柳家協議会会長、句集「風のいと」

13

さそはるるように
那り花に鳥のあと

まるで誘われるように、花々に鳥の跡がのこっている

小谷 一指

鳥取市片原出身

菓子屋「亀甲や」主人。因幡俳壇主流風風曲八世を嗣ぐ。

14

草に置くコップ危し鮎膾

草の上に、中身がこぼれそうなコップと、あゆなますを置いている（夏のある日）

石原 雁

鳥取市東大路出身

智頭保健所所長を辞し、医院を開業、「ホトトギス」同人となる。昭和6年俳誌「野火」を創刊。

15

知る知らぬ御法に洩れぬ
諸人の跡したはる、面影のやま

知っているものも知らないものも、歴史に名を残さないたくさんの人の痕跡がしたはれる、面影の山

遊行上人

1731年、遊行上人(50世)が、真教寺逗留の際に詠じられた一首。遊行上人たちは幕府の命を受け、民衆の教化指導のために、馬で行脚していたという。

16

あさがらす鳴きて越えつる山の端は
ねむれるごとく未だ静けし

あさカラスが鳴いて越えていく山のふもととは、眠っているかのように未だ静かである

安木 弘蔭



中島宣門、新貞老に学ぶ。母が万葉歌人の二女であったため純然たる「万葉派」として重きをなした。著書に「仙動木園遺稿」がある。

17

因幡にも仰ぐ空あり初しぐれ

因幡で仰いだ空に、冬の時雨が降る

岡田 機外

鳥取市国府町奥谷出身

明治24年俳誌「鹿野苑」を創刊、27年文名庵三世を嗣ぐ。32年「鶯峰吟社」創立、地方俳壇の指導の中心となり、子弟三千人に及ぶ。

18

鳩吹くや木隠れ多き山島

木の間の多い山の畑に、秋風がかけぬけ、鳩笛をならしているようである

坂本 四方太

岩美町大谷出身

「ホトトギス」創刊号より同人となり、高浜虚子、正岡子規、夏目漱石等と交友深く、存在は高く評価されている。

19

春霞五百重たらなびく群山の
奥の高嶺はこさめ降るらし

春霞が幾重にもたちこめる山々に、奥の高嶺では、小雨が降っているようだ

新 貞老

鳥取藩士、明治初期の歌人（柿園派）医術を学ぶ。国学家業、因幡二十士の一人、佐渡相川県権知事、字倍神社宮司となり、柿園派の歌風を天下に広めた。

20

松杉の枝をしたたる白露に
かすむ野づらの雨を知るかな

（仲秋に）松や杉の枝に白露がしたたる様に、かすんでいる野原に雨がふっていることを知る

飯田 年平

鹿野町寺内出身

幕末、明治の国学者、鳥取藩国学方として、藩内の子弟教育を託された。

21

遠く来て千代川左岸歩み居り
面影山に月は昇れる

遠くやってきた千代川の左岸を歩いていると、面影山に月がのぼっていく

下田 一清

鳥取市西大路出身

大正9年「曠野社」を結成、11年「橄欖」創刊と同時に同人となり歌壇の啓蒙に努める。農協組合長を辞した後、農民歌人として活躍する。

22

限りある生命いたわり山頂に
悠遠を生きる陽をみおろしつ

限りのある命をいたわりながら登った山頂から、永遠に輝く太陽を見下ろしている

枝野 登代秋

松江市殿町出身

歌人、鳥取短歌会結成、昭和6年「情脈」創刊、1万人余りの歌人の指導をした。

23

いくそたび生れ生れて日の本の
学びの道を護り立てなむ

幾たび生まれ変わっても、日本の学びの道を護っていく

橋田 邦彦

倉吉市研屋町出身

医学者、教育者、号は「無適」、「科学する心」を提唱。近衛、東條内閣で、文部大臣に就任、終戦後戦犯指名を受け、出頭の際に自決する。

24

山のはにすばる輝く水無月の
夜はさよ中と更けにけらしも

山の端に昇が輝く6月の、今宵はとっぴりと更けてしまったことよ

香川 景樹

江戸時代後期の大歌人、鳥取藩士の二男として生まれ、26歳の時、京都に上がる。香川家の養子となり、清新な歌風を樹立し、「桂園派」をひろめた。

25

空にない風や櫻の散るちから

空には風が吹かなくとも、桜が（まるで）ちからをもって散っている（ようだ）

小谷 吞河

鳥取藩士、俳人、俳諧師、「吹萬堂二世」を承継して、35年の長期にわたって俳道生活に清進した。

26

昨日かも月まつ空にあふぎ見し
扇のたけは雪ふりにけり

昨日だったかしら、(満)月をまつて空をあお
ぎ見た扇のたけに、雪がふってきた

スミ ヤスヨシ

鷺見安歎

一七八四、一八四七

鳥取藩歌人御側御用人、衣川長秋に師事して、国典に詳
し。長秋逝去後、師家に尽くす。藩の文教推興に貢献し
た。

27

初秋やたった一羽の明からす

初秋(明け方)に、カラスが一羽飛んでいる

ツツミ ナンレイ

筒見南嶺

一七九七、一八六一

鳥取市二階町出身

藩の指定商人、大阪方面に出入りする傍ら、俳道に志
す。風々曲四世を継承して、長期にわたり俳諧の指導に
当たる。

28

柿の実の色つく里をふもとにて
もみじ奥ある山つづきかな

柿の実の色づいたふもとの里で、もみじが
山奥までつづいている(見事な景色だな)

ナカシマ ギモン

中島宣門

一八〇七、一八九四

城詰坊主に召し出され以後、諸役を勤め、日吉、勝田神社
の神官を務めた。紀州一辺到の鳥取藩の歌壇を嘆き「類
題稲葉集」を編む。

29

秋水の深きに懼をひらめかし

秋、深く澄み渡る水辺で、
(静かに) 懼をこぐ

タカダ イチダイ

高田一大

一九〇一、一九八一

鳥取市川端出身

俳人、実業家。山根機心の「無声」に参加、因幡吟社で活
躍。茶の花会を結成し「鳥取ホトトギス会」に発展する。

30

事しあらば髪をかぐろに染めなして
老いといふ名はとらじとぞ思ふ

何か一大事があれば、髪の色を黒く染め
て、老いという名前はとらないぞ(「老い
た」とは言わせないぞ)と思う

アゲチ マサナ

足立正声

一八四一、一九〇七

幕末、明治時代の武士・官僚。勤王論を主張し因幡二十
士事件に参加後長州南國隊に投じた。帰藩した後、明治
政府の諸陵頭・図書頭となり、男爵を授けられる。
※②③の歌碑は遊歩道から外れ、遊歩道と「法清寺」をつなぐ山道にある。

我が庵で生れた声ぞきりぎりす

我が庵で生まれたキリギリスの鳴き声がし
ている

コタニ タイプ

小谷大蕪

一七六八、一八三二

鳥取市智頭街道出身

風々曲派に対立した吹萬堂派を樹立した。蕪村の流れを
くみ、大蕪と号して因幡俳壇を華やかに盛り上げた。

32

かきつ田の早穂なみよる夕風は
秋の声にもなりにけるかな

田んぼに実った穂にふく夕風は、
秋のおとずれをさくようだな

オタニ フルカゲ

小谷古蔭

一八二二、一八八一

鳥取市栗谷出身

幕末、明治の歌人、国学者。神職の家に生まれる。双杉園
と号し、和歌をよくした。紀州に赴き、柿園派の推進力と
なる。後に鳥取藩の国学家業に召し出された。

34

待つ思ひ惜しむなげきのひまにだに
あはれほどなき花盛りかな

(待ち人を) 待ちのぞんで嘆いているあいだ
に、しみじみと短い花の盛りである

キヌガワ ナガアキ

衣川長秋

一七六六、一八三三

伊勢三重県出身

江戸中期の国学者。本居宣長に学ぶ。35歳の時、因幡鳥
取藩主「池田斉邦」に招かれ、藩内で国学を教授する。
「百人一首峯の梯」「田養の日記」等の著書がある。

33



風の春またなぶらるる老木哉 筒見南嶺

風の春またなぶらるる老木哉

風の強い春の日、今年もまた風になぶられ
(耐える) 老木だなあ

ツツミ ライシ

筒見雷師

一七五〇、一八一九

俳人、坂上瓜下の没後、35歳の時、風々曲二世を名乗った。

ウォークラリー

面影地区まち
づくり協議会で
は、毎年ウォー
クラリーを開催
しています。面
影山を散策しながら史跡に關
するクイズ出題もあり、子ど
もから年配者まで楽しんでい
ます。



37

夕月やしばらくあつて鷺の声

夕方に月がのほり、
しばらくして鷺の鳴き声が響き渡る

サカガミ カカ

坂上瓜下

一七四〇、一七八六

俳人、俳師、医師。松本竿秋を師とする。因幡俳壇の中
枢的蕉風俳諧の主流。風々曲系の初代であった。

面影マップ

至 県庁

至 産業道路

大代二



面影の史跡

わたしたちのふるさと面影

面影山は古墳や歴史をひめた碑文・伝説の宝庫です。
98代長慶天皇の御陵や恵心僧都が造ったとされる正蓮寺の毘沙門三尊
「面影伝説」にもある八百比丘尼跡など神秘性も豊かです。
歴史に彩られた面影山の幾多の史跡を紹介します。

こだからじぞう

子宝地藏



このお地藏さんは、江戸時代末期の享和4年(1804)正月、地元の念仏講の人たちによって建立されたものです。このお地藏さんを信心すれば子宝を授かるという話が広まり、子宝地藏と名づけられました。ご利益を受けて子どもに恵まれた人はお礼として、小さなお地藏さんを彫ってここに奉納したものと云われています。観音堂内にも高さ20cmぐらいの可愛らしい石地藏が11体あります。地藏祭り、地区の方が毎月第2土曜日参拝されている。

おさきみどりぶんがくひ

尾崎翠文学碑



昭和時代の初期・中央文壇で活躍した尾崎翠(明治9年〜昭和46年)は、岩美郡岩美町岩井で生まれ、父親の長太郎が面影尋常小学校の校長に赴任したのに伴って、(家で面影村大杖の土井家住宅に引越す)面影小学校に転入、明治42年(1909)3月同校を首席で終了しました。その後、鳥取高等女学校に進み卒業、岩美郡大岩小学校の代用教員時代から、中央の雑誌に短歌・詩・散文を投稿するなど頭角を現しました。日本女子大学を中退後、本格的な文筆活動を始めその作品は文壇で高い評価を受けるようになりました。
しかし、35歳で神経を病んで帰郷し、筆を断ちました。このため、文壇から忘れられ、まぼろしの作家ともいわれていましたが、1970年代から著作集や全集が刊行されるようになり、作品の映画化や、尾崎翠フォーラムが毎年開催されるようになりました。

めいとくさんちょうけい

明徳山長慶院



98代長慶天皇(在位1368〜1383)はお供を連れて京都を出発し丹波・但馬を経て面影山に滞在されました。当時因幡の国の城主であった山名氏冬は、至り尽くせりのお世話をしていましたが病気になるれ、遂に亡くなられました。このことが京の都に聞こえ、権大納言藤原長親の娘長谷姫がご冥福を祈るため、京都から来て、面影山(大杖地内)に長慶院を建て開山しました。
その後、応永の兵火、天正9年の羽柴筑前守秀吉により鳥取城が落城した際、さらに元禄年中にも火災に罹り消滅しました。その後、興禅寺7世寂禪和尚が享保2年、慈雲山の麓である大杖現在地に長慶庵として再建しました。

たていわだいごんげん

立岩大権現

この山の頂きは王雲山、通称「立岩さん」と呼ばれています。山麓の法清寺の奥の院とも云われていますが、元々直径30mぐらいの円墳丘であろうと考えられています。
中央に高さ150cm幅60cmの自然石の碑が立っています。
1千年の昔、比叡山の高僧 恵心僧都が回国の御この里に来て、国家安泰、五穀豊饒、悪疫退散を祈願して、法華経を一石一字に書き写して此処に埋めた経塚と言ひ伝えられています。
山麓の法清寺の奥の院と云われていますが、例祭は9月7日、里人や崇敬者によって盛大に執行されています。



ほうせいじそうとうしゅうほんぞんびやくえかんのん

法清寺曹洞宗本尊白衣観音



当寺は鳥取藩の家老池田利政の菩提寺で、当地には昔清冷山本願寺という七堂伽藍がありましたが、応永元年(1394)と元亀元年(1570)両度の合戦に兵災に罹って炎上し、玉雲庵という柱礎の小庵が残っていたのを幸いに、子孫代々着座席の要職を務めた利政の4男池田利恭が、宝暦元年(1751)に再建しました。
利政の位牌を岡山の安泰寺から移して開山をし、越泉和尚として、機外大和尚を中興の開師と尊崇しました。下池田家の墓地(利政と4代以降1族の墓)があります。
平成17年本堂、位牌堂、座禅堂、庫裡など全面改築されました。

くもやまはちまんぐう

雲山八幡宮

昭和29年八幡神社を雲山八幡宮に改称



祭神

誉田別命(ホンダワケノミコト)
保食神(ウケモチノカミ)

誉田別命は応神天皇ともいわれ、武士の守護神として八幡大菩薩の尊号を与えられています。
拝殿は明治40年建築、明治41年2月 雲山神社を八幡神社に改称しました。
さらに昭和29年雲山八幡宮と改称、祭神には獅子舞が奉納されています。
境内には面影小学校の旧泰安殿が移設してあります。

例祭 春5月5日 夏7月14日 秋10月5日

おもかげじんじや
面影神社 正蓮寺宇面影山



祭神 武甕槌神 (タケミカズチノカミ)
その昔、武王大明神(武甕槌神)は天照大神の指示を受けて出雲の国に下り、大国主命を説得して国土を奉還させました。
祭神として祀り始めた時期は不明ですが、宝暦10年(1760)に社殿を建立した棟札があります。当時は武王大明神と称していましたが明治元年(1868)に面影社と改め、さらに明治七年(1874)に面影神社と改称して村社に別せられました。

近くに毘沙門堂(県保護文化財)と多聞杉(とつとり銘木百選)があります。
例祭 10月8日 春3月8日 夏7月8日
狛犬の特徴：耳が立っており勇ましい。
最近、御影石で作成されました。

びしゃもんどう
毘沙門堂



もとは多聞園にあった修験道の礼拝施設で昭和30年代現在地に移されました。
祀られている毘沙門天・吉祥天・善願童子の3像は、今からおよそ1000年前、正蓮寺に滞在した比叡山の高僧恵心僧都が造ったものと伝えられています。正蓮寺は延元2年(1337)に兵火で寺も村も焼亡し、その後、3像は小堂で祀られ宝永3年(1706)に荒尾主計が建立した多聞寺の本尊となりましたが、明治維新後、多聞寺が廃寺となり、毘沙門堂で祀られるようになりました。
現在の堂は山内良磨氏が募金と私財を投げ打って造られました。毘沙門天・吉祥天の2像は県の保護文化財の指定を受けています。
後方丘上の多聞園には、兵燹時に立像を匿した石窟と毘沙門堂の歴史を記した碑文があります。



あずまや
東屋

面影山の山頂(標高1000m)付近にあり、面影、東今在家、桜谷、正蓮寺、どの遊歩道入口からでも登れます(急斜面ですが、正蓮寺側からが一番近い)。平成11年に作られ、毎年、面影地区自治会、区長会を中心に、付近の整備作業が行われています。自由に書けるノートも置いてあり、登山者の憩いの場所となっています。



たもんしぎ
多聞杉

昔この地にあった毘沙門堂の創建と同時に植栽されたとされ、現在でも毘沙門堂と共に信仰の対象とされています。特徴は大きな枝が四方に伸びて堂々としています。この木が面影に存在することが郷土の誇りであり、存在意義は大きなものがあります。
樹齢300年 樹高30m幹回り4.6m
鳥取の銘木100選に選定されています。



桜谷神社 桜谷岡谷



祭神

瀬織津姫命(セオリツヒメノミコト)
1神のみ祀る因幡唯一の神社

古くは鎮守大名神と称しましたが明治7年桜谷神社と改称。

瀬織津姫命は、神道の祭祀の際に唱える大祝詞の中に登場する神で、罪穢れをはらう祓戸四神のうちの二柱です。平成25年に八上白鬼ファンクラブから瀬織津姫命の石像が参道に奉納されました。

近くに長慶天皇御陵墓と伝わる宝篋印塔(ほうくわういんとう)が三基あります。

例祭 春 4月19日 夏 7月18日 秋 10月19日

狛犬の特徴：石造、胸に子犬を抱き愛らしい姿で大小2対鎮座しています。

袈裟懸け地蔵

けさがけじぞう



伝説によると、寛永の頃(1624~1643)武勇で名を知られた鳥取藩士臼井正武(本覚)(1653没)が深夜、昼でもなお暗く、鬱蒼としたここ地蔵森に差し掛かると、大入道が現れて行く手をさえぎりました。翌朝見届けに行くと、6体地蔵のうちの1体が、みごと袈裟がけに斬り落されて道端に転がっていたといいます。袈裟がけの切り傷が今も残っている地蔵さまを、昔から袈裟がけ地蔵と呼んでいます。

長慶天皇墓 桜谷岡谷、通称御王畑

長慶天皇は南北朝時代南朝の3代の天皇として16年間即位され、応永元年(1394)崩御、宝算52歳でした。しかし、その崩御地については不明のままです。因幡の国潜幸の伝説によると、元中9年(1392)大覚寺をお忍びで出られ、丹波の国から但馬を経由し因幡の国小田谷の長郷に滞在されていました。正蓮寺の修験者正蓮坊の案内で面影山麓の正蓮寺に遷られたのち、御所裡の北浦御殿に住まわれました。

法皇は遂にこの山中で崩御されたので、陵墓は桜谷御王畑に造られました。

その後、法皇の御子玉川宮の御女東と申す姫君が因幡に参られ、長慶院の傍らに観音堂を建て落飾して住まわれました。その後、姫君の御父玉川宮は嘉吉3年、因幡に下られ姫君と一緒に住まわれていましたが、ご老体であったため後遂に薨御になりました。

この宝篋印塔の大きい方が長慶法皇の御陵墓で、小さい2基が玉川宮と姫君の墓であると伝えられています。



八百比丘尼屋敷跡

はっぴやくびくにやしあめと

昔、東今在家の山中に八百比丘尼が住んでいたという伝説が残っています。

この伝説は、近郷でも語られています。共通点は、娘が人魚の肉を食べて不老不死となり、身をはかなくて仏門に入り諸国を巡ったと言われています。

屋敷跡は古墳(面影山64号墳)で村人が明治25年頃掘削して、出土品は東京国立博物館に保管されています。

この比丘尼屋敷跡には古墳の一部に使用されたと思われる大きな石が掘削地に現れています。



面影伝説

面影山の八百比丘尼

おもかげやま はっぴやくびくに



昔むかし、面影山の中腹に母と娘の二人の親子が住んでいました。ある時、お母さんは、近くの大路山の岩穴に住んでいる友達から、招待を受けて出かけました。お母さんの友達は沢山のご馳走のお膳の真ん中に、初めて見る魚の煮つけを盛った皿がありました。「これは人魚という、とっても美味しい魚だから、ぜひ食べてみて」と勧めてくれましたが、その魚の頭の方は、人間の形によく似ていたので、お母さんは気分が悪くなり、手をつけることが出来ませんでした。友達はお膳に残ったご馳走を全部、土産に包んでくれました。家に帰ったお母さんは、貰った土産をそのまま戸棚にしまって、仕事に出かけました。お母さんの留守中、おやつを探していた娘は、土産の包に気が付きました。包を開けてみると美味しそうな匂いがある、これまで見たことがない魚が入っていました。一口食べてみると、たいへん美味しかったので、とうとう全部食べてしまいました。お母さんが帰って来ましたが、「お母さん、戸棚の中にあつた珍しい魚は、たいへん旨かったので、みんな食ってしまったぜ」と話しました。お母さんはびっくりしました。「えっ? あんな気味の悪い姿をしたものを、よくも食べたもんだ。腹が痛くなっても知らんぞ」と暗い顔をしました。

何十年か月日が経ちました。娘は病気になるどころか、以前より一層元気になるりました。お母さんが亡くなった後、娘は尼さんになって、お母さんの冥福を祈り続けました。何年経っても歳をとりません。百歳を遥かに超えた超長寿であったそうです。村の人々は、人魚を食べて長生きをした彼女を「八百比丘尼」と呼びました。

面影山の東今在家榜示には「比丘尼屋敷」という場所が残っています。



上山神社 東今在家字上山



祭神

須佐之男命 (スサノオノミコト)
櫛名田比売命 (クシナダヒメノミコト)

古くより牛頭天王(防疫の神)と称します。明和3年(1766)社殿建立、明治7年上山神社と改称しました。

境内に不増不減の井戸やシイの巨木(高さ約20m周囲約4.5m)をはじめとして、タブムクシデ、シイ、ツバキ等の木が鬱蒼と茂る森です。

例祭 例祭7月13日 春4月13日
秋(お釜立て神事)10月13日

狛犬の特徴：狛石造、二段の基台に後ろ脚と尾を上げ飛び出すような勇壮な権えをしている。

鹽竈神社 旧大杵村 現在は面影一丁目



祭神

鹽土神・素戔鳴命・鹽土老翁神
(シオツチノオジノカミ)

安産成就・産業振興の神として崇められています。

明治22年大杵の田中喜三郎が東北陸奥国一ノ宮「鹽竈神社」(宮城県)の分霊を勧請して創建されたもので、明治の終わりに、「大杵神社」と大字新の「百先神社」を合祀しました。

境内には社務所、勤番所、相撲場上屋がありましたが昭和18年の鳥取大地震で倒壊しました。本殿奥に神代杉二本があります。

例祭 4月第2日曜日

今在家橋紀功碑

いまざいけはしきこうひ



国府川(現袋川)の段子瀬に架かる橋は、小さく粗末なもので、通行人が橋から川に落ちて死亡したり、洪水の度に橋が流されたりしました。橋に通ずる地道も狭く、大変不便でした。

村民から改修の要望があり、町の有力者、吉村徳平氏に相談したところ賛成を得て、道路拡張の用地として吉村氏の所有地360坪の寄付を受けました。橋の長さ48m、道の長さ44.5m。大正2年(1913)5月に着工、同年9月に竣工。車馬が通る広い堅牢な橋が完成しました。その時の記念碑として、面影山74号墳から出土した石棺の石を使って建てられました。

いせみちの道標

みちしるべ

大小二基の道標が置かれています。

大きい方は高さ1m30cmで「右いせ道左一ノミヤ道」(因幡一ノ宮である宇倍神宮のこと)(天保十五年八月)とあるので、今から170年位前に彫られたとみられます。小さい道標は、高さ50cmで「右いせ道左むらみち」とあります。「いせみち」とは伊勢神宮に参詣する道であり、江戸時代に庶民の間でもお伊勢参りが流行しました。八東川に沿って若桜を経由して「氷ノ山」を越えて伊勢神宮を目指したのです。



面影山73号墳

面影山に98基と多くの古墳が確認されていますが、その殆どは円墳・方形墳です。73号墳は前方後円墳で墳墓部がこんもりと盛り上がり、面影山の古墳のなかでは最大です。周辺はナラ、クマシラギ等が生い茂っています。



あとがき

歌碑取り替えを計画したのは平成23年度でした。それから4年の歳月を経て、漸く、この度完了しました。私たち面影地区まちづくり協議会では、歌碑取り替えが完成したのを機会に、記念となる冊子を作る結論に達し委員会を立ち上げました。参考にしたのが面影山文学散歩道の会の「面影山文学散歩道」の資料でした。

そもそも面影地区は、法美郡と邑美郡に分かれていました。法美郡には大杵村、今在家村、正蓮寺村、桜谷村の4村が属してました。また、邑美郡は雲山村、新村の2村でした。

明治23年に全国市町村制が敷かれた折、村名を宇部野村と、美保村にの話をあつたようですが、歴史に彩られた「面影山」を有する先出の6村が強気に主張し遂に村名が「面影村」となったそうです。郡名は法美郡であり、明治29年からは岩美郡に所属しました。

面影地区は、幾多の苦難に遭遇しながら、人々はいつでも凛として「面影山」を囲繞する村人は平和な生活を送ったのでした。

時代は流れ、昭和42年(43年頃)から面影団地(現在の面影一丁目)の造成に着手、分譲住宅が建ち、昭和46年に面影団地自治会が誕生しました。

以降の各町区での開発造成が急ピッチで進展し、目覚ましい発展を遂げ、現在の隆盛につながっています。

面影山は歴史と史跡の宝庫です。そこに暮らす私たちは、その宝をいつまでも守りながら次世代に引き渡すのが責務です。

この記念誌を「わたしたちのふるさと面影」と名付け、副題に「〜37の歌碑と歴史〜」としました。

編集委員会も数次にわたる会議を重ね、ここに漸く出来上がりました。

最後になりましたが編集にも参加され、また玉稿をお寄せ戴いた面影郷土史研究会様、いろいろなアイデアやアドバイスを発刊にご協力いただきました方々に心より厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

わたしたちのふるさと面影 ~37の歌碑と歴史~

2015年3月31日 発行

発行者 面影地区まちづくり協議会 記念冊子編集委員会
〒680-0853 鳥取市桜谷162-6 TEL 0857-24-9033
印刷 中央印刷株式会社

歌碑取り替え記念冊子作成委員会

まちづくり協議会 会長 若松 博康 編集委員 井関 重俊 (史跡調査指導)
編集委員 須崎 宏喜 編集委員 尾坂 功 (写真提供)
編集委員 植田 宗万 編集委員 小 林 哲夫
編集委員 樋口 大和 編集委員 清水 義昭
編集委員 谷田 明美 編集委員 奥村 俊彰 (鳥取県歌人協会会長)
編集委員 徳田 敏江 歌碑解説協力 北尾 熱 (鳥取県歴史館学芸員)
編集委員 田中 美紀 (敬称略)